

登山月報

キョーリン製薬グループ presents	1
ボルダリング・ジャパンカップ 2014	
Sochi Olympic 2014	2
Ice Climbing Demonstration Program	
第52回海外登山技術研究会	6
平成25年度ジュニア・普及情報交換会報告	7
第64回 Mountain World	9
IAN McNAUGHT・DAVIS さん	10
国際山岳連盟(UIAA) 元会長を偲び	
【新連載】北から南から ブロック便り	11
平成25年度代表者会議報告	12
JMA、寄贈図書、編集後記	13

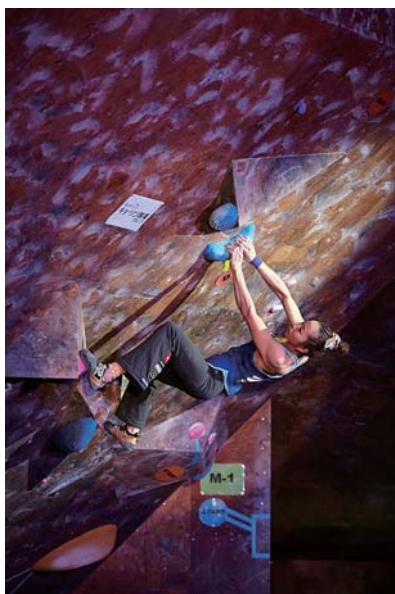


2月22日・23日、東静岡のボルダリングジム「クライミングジャム」において、第9回となるボルダリング・ジャパンカップが、キョーリン製薬グループ、マムートジャパンのスポンサーで開催された。

女子の注目はなんといっても、野口啓代の9連覇なるかということだろう。もちろん、野口が実力的に抜きん出ていることは間違いない。ただし、どんな選手にも取りこぼしということはあるし、ライバルも多い。小田桃花は、ジャパンカップではないが野口に一度勝った経験をもつし、先日行なわれたザ・ノース・フェイス・カップ本選で、野口とスーパーファイナルを争った野中生萌もいる。

しかし野口は強かった。予選5課題をすべて一撃。三上智子と野中が5完登で続いた。セミファイナルで野口は4課題を6トライで完登。三上も11トライながら同じく4完登と大健闘。野中も3課題を一撃して続く。しかし、ふたりの追従もここまで。野口は、決勝ではほとんどの課題を余裕をもって完登し、楽々と勝利を手にした。

男子の注目は、



格の違いを見せた野口啓代

BJC男子のジnkクス「同じ選手の2度の優勝はない」を誰かが破るのか、もしくはそのジnkクスは続くのか、である。本命と目される4人——杉本怜、藤井快、堀創、安間佐千のうち、杉本か藤井が勝てばジnkクスは守られ、堀か安間が勝てば、ジnkクスは破られることになる。



大金星を勝ち取った山内誠

しかし、そんな本命予想にまったく名前が挙がらなかった男が、栄冠を手にするようになる。山内誠はセミファイナルを、たったの1完登ながら通過。ほかの5人の進出者はすべて2~4完登である。

山内はこの、まさに千載一遇のチャンスを逃さなかった。ファイナルのスタートは一番手、山内に怖いものなどなにもない。見ている者が圧倒されるような気迫の16トライの結果は、ただひとりの全4課題完登であった。

感動の場面を創ってくれたルートセッターの諸君(岡野寛、平嶋元、伊藤剛史、松島暁人、マニユエル・ハスラー)、そしてその舞台を提供してくれた、クライミングジャムさんに紙面を借りて感謝したい。

(文=北山 真 写真=山本浩明)

男子		女子	
1	山内 誠	1	野口 啓代
2	杉本 怜	2	小田 桃花
3	藤井 快	3	小林 由佳
4	堀 創	4	三上 智子
5	安間 佐千	5	小武 芽生
6	千本木洋介	6	野中 生萌

行動内容	2月1日	千歳→成田
	2月2日	成田→モスクワ
	2月3日	モスクワ→ソチ
	2月4日～7日	アイスイベント準備手伝い
	2月8日～13日	アイスクライミング デモンストレーション
	2月14日	ソチ→モスクワ
	2月15日	モスクワ→成田→千歳

2013年7月に日本山岳協会より“ソチオリンピックでデモ競技としてアイスクライミングをするようですが参加しませんか？”との打診を受ける。

アイスクライミングW杯に参加する選手の間では“ソチオリンピックで何か有りそうだ”と言う噂はかなり前から言われていた。もしそうなら参加したいと私は思い2010年から毎年ロシアのキーロフW杯に出場し行動基盤を作っていた。

正式競技なのか？ 公開競技なのか？ デモ競技とは何なのか？ 全くインフォメーションされぬまま参加の意向を固め、2014年1月のW杯へ参加することとなる。

W杯で多くの選手にソチの事を聞いても、誰も情報を持ってはおらず、怪しいので参加しないという選手も多く見受けられた。一方オリンピック参加をコマーシャルとして自己アピールする選手もあり、そんな彼らもソチへ向かう1か月前になっても一体何が行われるのかを知ることは出来なかった。

このプログラムは2月3日～13日、2月14日～24日までの2つのグループに分けられていた。私はためらわず最初のグループを選択した。理由は最初の方が面白そうな予感だったからである。詳細な状況も



アイスクライミング会場全景

分らぬまま私はソチへ出発する事となる。

ロシアでの行動はいつも綱渡りだ。旅行代理店を使うとお金がかかるので、入国VISA申請から自分で行うのだが、いつも時間を要する。出たところ勝負、後は現地で何とかするしかない。

ソチに到着し、さてどう行動しようかと空港内をウロウロしていると、作業服を着た見知らぬおじさんが『お前はクライマーか？』と聞いてくる。『そうだよ。日本から来た。』と答えると車に案内された。このおじさんは誰だろう？ そして何故私をクライマーと分ったのだろう？ 疑問は多いが、次の行動の考えも無いので、おじさんの車でどこかへ運ばれる事となる。

空港から15分ほど走りアパートへ運ばれた。そこにはドイツ、モンゴルの選手が既に到着していた。とりあえず綱渡りは成功だ。しかしこのアパートは電気もお湯も無く、わずか2時間で引越越しとなった。新たに案内されたのはアルメニア人の住む集落にあるおばあちゃんと息子達の住む家族のアパートだ。私達はホームステイする事となった。

度々ロシアの関係者が訪れ、少しのインフォメーションを貰う。結局は行動の予定は無いとの通知だ。スイス、アゼルバイジャンの選手も追加され、僕らは余る時間でアイスイベント準備の手伝い等をしながら時間を潰す。

オリンピックパークに入れたのは6日。まだ開会式前のパーク内はあちこちで工事が行われ、本当に間に合うのだろうかと思うほどだ。それはアイスクライミング・ステージも同じで多くのスタッフが昼夜を問わず作業していた。私達も手伝いをしながら、まだ開会前でガランとしたパークを何度も何度も散歩した。



会場の様子

7日よいよ開会式だ。多くの人がパークにどっと押し寄せる。開会式会場へ入るチケットを持たない私達はパーク内でビールを飲みながら、聖火が灯るのをずっと待っていた。聖火はパーク中心の聖火台へと運ばれ、盛大な花火と共にオリンピックは開幕した。私はこの素晴らしい場面に出会えたことに心から感謝した。

8日から私達のアイスクライミング・デモンストレーションが開始された。日中はアイスタワーを使って一般の人への体験クライミング。同時にドライツerring壁でのデモンストレーション。夜にはライトアップされたアイスタワーでのスピードアイスクライミングのデモンストレーションである。

ソチは気温10度を超え春の陽気だ。アイスタワーには約17mの氷の面が3面。通常はカバーで覆われ、日の当らぬ面のみを開放し登る事が出来る。タワー自体を大きな冷凍庫のような構造とし、オリンピック会場にあるアイスホッケー・スタジアムの製氷カスなどをコンテナで運び、手作業で壁に貼り付けているのだ。ドライツerring壁は大きなテントの両端に傾斜のあるコンパネを張りホールドを設置。天井部分には大きな立方体を6つぶら下げ、それぞれにホールドと打ち込み可能な樹脂フォームを張り付けている。

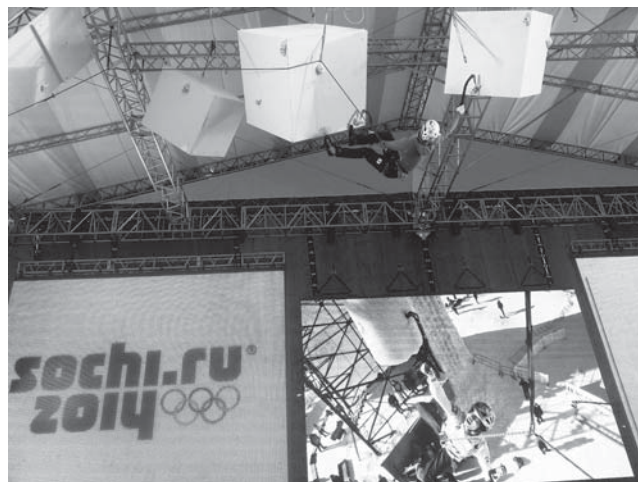
初日の体験アイスクライミングには300人を超える人が訪れた。ロシアのスタッフ、各国の選手と共にその対応をこなし、夕方ドライ壁でのデモンストレーションが開始された。

初日に天井にぶら下がる立方体は4つ。まだ準備途中である。ロシアの選手から『masa(海外での私の呼び名)登れよ!』と言われ1番スタート。久しくトレーニングもクライミングもしていないので、かなりパンプしたが、ここは落ちる訳にはいかないと思い何とかオンサイト。私の仕事が始まった。

多くのセキュリティと柵に囲まれたオリンピック



体験アイスクライミングの参加者



デモンストレーション1本目の奈良

は誰でもが触れる事の出来る世界では無い。入場パスと入場チケットが無いとオリンピックパークにも入れず、更に競技を見るには観戦チケットが必要だ。また飲み物、食べ物の持ち込みも禁止されセキュリティーゲートで没収される。パーク内の食料はどれもオリンピック価格で品数も少ない。オリンピックで売っているのはオフィシャルの商品だけだ。ジュースはコココーラ社、ビールはバルチカ社、お土産はボスコ社、極めつけは使えるカードはVISAだけだ。オリンピックは大きなマーケットとして動いている。

アイスイベント・ステージの裏には作業員が寝泊まりし、休憩するコンテナがある。そこにはお湯、コーヒー、紅茶、インスタント麺、パン等々、非常に満足いく品揃えだ。食べて良いと言われていないが、毎日ここで勝手に食べる事とした。私のお気に入りにはグレーシャーと呼ばれる彼らの常食で、何かの穀物を炊飯器で炊いた茶色いご飯のような食べ物。あまりに美味しそうに食べるので、炊き上がるとロシア人が私を呼びに来るようになった。

デモンストレーションはショーアップされてはおらず、各自が自由なタイミングで登るスタイルで進められた。登ると会場の司会者が大きくアナウンスし、訪れた観客からは声援がかかる。登り終わると多くの観客と一緒に写真を撮ってと行列を作り、少しだけスターの気分になる。

しかしデモンストレーションとはいえ、なかなか難しいルートだ。ワールドカップ優勝経験のあるロシア選手達は更にホールドを限定したり、往復したりとデモンストレーションなのかトレーニングなのか不明なクライミングだ。私自身も目標とするラインをいくつか設定し、帰国前には全部終わらせようと毎日トライを重ねた。

会場には10時過ぎから21時頃まで毎日足を運んだ。

その時間中ずっと登っているのは身体が持たないので、登ってはオリンピックパークを散歩。登っては他国の選手とお茶、本当に贅沢な時間だ。

選手達は気の向くまま1日休んだり、自分たちでオリンピック競技のチケットを取って観戦に出向いていた。しかし私は特に他の用事も無く、毎日登り続けていた。そうするとイベントのスタッフが『お前強いな！』『日本人真面目だな！』と中々の高評価を貰い、非常に仲良くしてくれるようになった。私にとってこの場所が非常に居心地の良い環境となった。

今回のデモンストレーションはロシア山岳連盟が主催しUIAAが協賛のような形で進められているようだ。イベント会場はオリンピック公式パートナーであるロシアのスペルバンクという銀行がスポンサーとなっている。

今回の目的は様々だ、将来のオリンピックへのアクション、アイスクライミングの普及、ロシアのアイスクライミングの紹介、私達が登るのは要するに客寄せである。各国のメディアが入っているオリンピックの場面でのアイスクライミング。たとえ片隅であっても、多くのカメラが訪れる。選手の国のテレビ取材が入ると全ての事はそれを最優先に進行し、他国選手がビレーやサポートにまわる。私もテレビ取材を受けると他国選手やスタッフに『良い仕事だ！』と褒めて貰えるのだ。私達はオリンピックを利用して、世界各国にアイスクライミングを伝える仕事をしているのだと改めて感じていた。

デモンストレーションを行っているのは私達選手だけでは無い。ロシアのキッズクライマーも参加している。彼らはW杯が開催されているキーロフ住む10歳前後の子供達だ。現在W杯上位に位置するロシア選手の多くはキーロフに住んでおり、彼らの次を担うクライマーである。聞くと100人以上のキッズアイスクライマーがおり、今回オリンピックに参加している



奈良のクライミング

る10歳の子供達も既に経験5年目と言っている。登りも流石で、日本でアイスクライミングをやっています！という大人よりはるかに上手い。非常に素直な性格で、人懐っこく、私は毎日子供達と遊んでいた。日本の子供のようにゲームで時間を使ったりせず、会場内をチョロチョロと走りまわり、私を見つけてはちょっかいをしてくる。他国の関係者からは“アイスクライミングをする若者がいない。”“コンペも年齢層が年々上がっている。”との事を聞く。UIAAではユースのアイスクライミングW杯も開催しているが、それほど多くの選手が集まるわけではない。このロシアの子供達のように生活の中にアイスクライミングがあるのは、おそらくロシア、中でもキーロフに限った事ではないかと考える。

オリンピックと同日程で予定されていたイタリアW杯。全戦出場する選手は次のグループで入ってくるはずだったが、W杯会場に雪崩の危険性が有るほどの降雪があり大会がキャンセルされた。イタリアにいた選手の何人かがオリンピックへ早めに参加したことで第1グループは更に多様な選手で構成されていった。同じアパートで共同生活を行う中には選手の他にもUIAA最高責任者のフリッツさん、UIAAカメラマンのルーカスもあり、毎夜アイスクライミングの将来についてのディスカッションが行われた。多くの選手がこのスポーツがオリンピック種目になるのか？という事に自信が無い様子だ。そして何を改善すべきか。何を行動すべきか。非常に多くの時間を使い話し合われていた。ここにいる多くの選手はクライミングを職業としていた。プロのアスリートもいるが、ガイドやジム経営、スポーツインストラクター、クライミングを使うことで生計を立てている。彼らにとってオリンピックスポーツになると言う事は非常に重要だ。一方私は職業を持ちクライミングからお金を生み出してはいない。私の意見は彼らの意見とは重さが異なっているのだ。

私はアイスクライミングがオリンピック種目になれば良いと思っている。なぜなら自分にも選手としてのオリンピックに出場するチャンスが残っているからだ。ただそれだけである。もし種目にならなくても、私の生活は何一つ変わらない。だから種目にならなくても問題は無い。私はアイスクライミングを使って何かを得ようとは思っていないのだ。

4年後のオリンピックは韓国で開催される。いま世界のアイスコンペ事情でいえば、最も素晴らしい大会とされるのが韓国W杯。多くの選手を抱え、年6戦以

上のシリーズ戦を展開する韓国が、次のオリンピック開催地だ。世界の多くの選手が韓国に期待し、オリンピックの可能性を夢に見ている。私も既に10回近く韓国でのアイスコンペに参加し韓国での基盤を整備している。

しかし、オリンピック種目となる事はそんなに簡単な事ではない。オリンピックはスポーツを超えた大きな存在として様々な事情の中で動いているようだ。ただもし、4年後韓国オリンピックでアイスクライミングの何らかがあった時に、私に声がかかるように準備を進めておく事は考えている。なぜならオリンピックは面白そうだから。

2月13日、ソチオリンピックでのデモンストレーションも私にとっては今日が最後の日となった。目標とする2つのルートはなんとか終わらせた。そして6日連続で登り左肩に強い痛みを感じている。日が落ち最後の1本。私は仲良くなったロシアの男性にビレーを頼んだ。天井に6つぶら下がる立方体。その中で会場のど真ん中に下がる立方体でマントルを返し、上に立ってみようと思っていた。ビレーヤーにジェスチャーとわずかな英語で意思を告げ、私は最後の1本を登る。非常に不安定な立方体の上に立ち、会場を振り向き強く手を上げた。これにてオリンピック初登、オリンピックサミット、もう何でも良い。ここに居る事に感謝と、喜びを感じ、大きな声で叫んだ。僕のオリンピックが終わった。・・・と思ったら下からジャンプの声がかかる。あーそこまで想定していない。私には妻と2人の子供がいる。そしてジャンプしたことない。陽気なカナダクライマーがゴーゴーとせきたてる。やむなし。とりあえず格好悪く飛び降り、地面で深くお辞儀をした。あージャンプ、、練習しておくべきだった。最後にきまらないのはいつも通りだ。

イベントスタッフ、ロシアのクライマー、まだ残る他国のクライマーにお礼と再開の約束をし、固くハグをした。そして私と同じく今日が最終日のクライマーと聖火を見ながらビールでも飲もうぜと会場を後にした。

聖火前ではメダルセレモニーが行われていた。そのステージは本当に光り輝き、多くの人がメダリストを讃え、おしみなく拍手をしていた。国旗と国歌が聖火前を飾り、その選手にとって最高の瞬間を迎えていた。

私達はアスリートでは無く、イベントスタッフとしてのオリンピックに参加をしている。選手村のような居心地の良いスペースは与えられず、ぬるま湯のシャワーと毎日のカップ麺、1度も変えられないシャツと、

いつもゴミの山のテーブル。でも私は幸せだった。オリンピックの片隅としてもここに参加できたこと、多くの国の選手と1つの目的で動いたこと。多くの意見を聞いた事。そう思いながら最後に聖火を見ていると、

不思議と胸が熱くなる。この火を次に見る時、私はどんな立場なのだろうか。どんな色に見えるのだろうか。そう思いながらオリンピックパークでの仕事を終えた。

日本山岳協会には行動に関する補助、代表のユニフォーム等を提供頂き、また色々な段取り、手続きをお手伝い頂いた事に深く感謝いたします。

この行動が世界で、日本で、どのような意味が有り、どのような展開をしていくのか私には見えていませんが、オリンピックと言う場面にクライミングが参加した事実に、夢や目標を持つ人が1人でも多く出ると良いなと思っています。



最終日の聖火



ロシアの子供アイスクライマー

【お詫びと訂正】

『登山月報』第539号の1頁右上から9行目の原秀樹(熊本)さんは徳島県山岳連盟の誤りでした。お詫びして訂正します。

第52回海外登山技術研究会

「第52回海外登山技術研究会」が2月15～16日に国立オリンピック記念青少年総合センターで行われた。今回は新しい試みとして、15日は日本山岳協会、16日は東京都山岳連盟主管による、「高所順応研究会」をプログラムに織り込み開催された。この時期に各団体が行う「海外・高所登山」関係の研究会を共同で行おうという趣旨で、その第一歩である。

●海外登山報告(15日)

「中国チョンライ山系クライミング」慶応大学山岳部プロジェクト100隊、「アウトライアー東峰初登頂」青山学院アウトライアー登山隊2013、「K6」K6登山隊、「K2」栃木ヒマラヤ研究会K2登山隊の各登山隊による報告、「2013年の海外登山を振り返る」池田常道講師・海外登山情報など。

慶応大学山岳部のOB、現役を交えたクライミングは、現役で登山を続けるOBの豊富な経験をもとに計画されたのであろう、山の選定、ライン取りなどもしっかりとっていて、報告を聞きながら思わず隣の人に「楽しそう」と言ってしまうくらい、快適そうな岩登りの臨場感あふれる報告であった。

青山学院アウトライアー登山隊、コーチ以下現役はタプレジュンからのアプローチを歩いて入山したという、コーチが居るとはいえ、現役にとって、未だあまりポピュラーとは言えないグンサへの道をキャラバンしたという経験は、何物にも代え難い経験となったに違いない。現役3名を含む登山隊を送り出せる組織力は、大学山岳部の衰退が言われて久しい昨今、素晴らしいと思う。詳しい内情は分からないが、国内に残った、現役の活動のフォロー、Exp.に参加する現役への諸々の援助、留守本部の体制など送り出したOBの方々にはクリアすべき様々なことがあったはずである。有名な山域に人々が集中しがちなネパールであるが、一步その外に出れば静かな山を楽しめる、外国人が列をなしているのはほんの一部の山だけであり、そうではない山域を選定すれば、他に登山隊のいないルート、BCで、登山を楽しめる。よく言われることだが、なかなか実践は難しい。OBと現役、ヘリと徒歩キャラバン、うまくバランスのとれたExp.であったのだろう。萩原氏のテンポの良い解りやすい報告を聞きながらそんなことを考えていた。

K6、宮城公博氏の報告は意表をついて、称名廊下、ハンノキ滝クライミングの話から始まった、一瞬戸惑

いがあったが、彼らの山への思いを込めた話に次第に引き込まれていく、なぜこのルートに挑んだのか、危険を承知で折り合いをつけていくスタイルに、参加者は聞き入っていた。やがて話はK6に入っていたが、その話し方とは裏腹に、ルート設定などには細心の注意を払っているように感じた、そのスタイルは一見危険そうに見えるが、安全確保には怠りがないようだ。宮城氏の熱くてさらっとした報告に、心地よい刺激を受けた。

「K2」栃木ヒマラヤ研究会、栃木ヒマラヤ研究会で堅実な活動を続ける北村誠一氏の報告。残念ながら登頂はできなかったが、登山現場の貴重な情報、報告を頂いた。報告書には次に行く人の参考になる情報が多く記載されている。情報はもらうが、残さない風潮の昨今、大事なことである。(参加者35名)

●東京都山岳連盟主管「高所順応研究会」(16日)

「高所順応への心構え」、ネパールに2年間滞在経験のある竹花晃氏の講演。ご自身の体験に基づく、高所未経験の方にも分かり易いお話で、参考文献も豊富に紹介されており、とても聞きやすかった。

「高度障害の実例と対処」・塩田純一氏。高所順応、高度障害に個人差がある以上、症例を挙げて学習していくしかないのだろう。高所に何回行っても、高度障害の危険はついて回るが、そう度々高山病にかかった人に遭遇するわけではない。色々なケースを知っておくのは、大切なことだと思う。大変勉強になりました。Part4からPart8(高山病の初期症状の見つけ方・高所でのチェックポイント・どんな薬を持って行ったらよいかetc)も知っておかなければならない事、参考になった。

「私の高所順応法」・鈴木百合子氏。初めて経験する高度に行くに当り、自分たちで考え、企画、立案、そして実行していく。高度障害についても、対処方法を





学びながら、取捨選択していく。お話が経験したばかりの事に基づいており、とても新鮮だった。新たに高所を目指す方たちの良い指標になったのではないと思う。

登山者、トレkker、医師の立場や実際の登山経験に沿っての、講師の豊富な経験に基づく高所順応についての分かり易い講演で、参加者にも理解しやすく、得るものも大きかったと思う。(参加者35名)

前夜からの大雪の影響が大きく、参加できなかった人も多かったと思われるが、「高所順応研究会」とのコラボは参加者、開催者の両者にとって有益であったと考える。今後詳しく分析評価して、次回へ繋げていきたい。(記 国際委員長 澤田 実)

平成25年度ジュニア・普及情報交換会報告

平成25年度ジュニア・普及情報交換会が、2月15日(土)国立オリンピック記念青少年総合センターにて開催された。当初は青森から鹿児島まで30名の参加者が、ジュニア世代に自然環境の大切さや山の素晴らしさを伝えるため、どのように実践しているかをディスカッションする予定だったが、近畿地方と関東甲信越地方を襲った観測史上最大の積雪の影響で総勢20名の参加となった。航空便の遅延にもかかわらず、遠方から駆け付けていただいた参加者には敬意を表したい。

最初に神崎忠男会長から挨拶。日山協は今年度から公益社団法人に移行したが「公益」で最も大切な事業は、国民への安全登山普及と青少年育成事業である。その意味でジュニア・普及委員会が果たす役割は非常に大きい。自由闊達な意見交換をしていただきたいと述べた。

●静岡県 塩澤寿雄氏 「日本一の富士山へ登ろう！」

静岡県山岳連盟としては初の取り組みである少年少女登山教室を、8月26・27日の2日間の日程で実施した。平成25年度は富士山が世界文化遺産に登録される記念すべき年に当たるため、この年に富士山へ登った子供達にとって一生の思い出になると考え、実現のために早くから準備を開始した。静岡県側から富士山へ登る登山口は、富士宮口、御殿場口、須走口と3つあるが、子供達を安全に登山させるためには比較的設備の整っている富士宮口が適当と判断した。また、宿泊には富士宮口に近い県立富士山麓山の村を利用することとした。実施時期については子供達の夏休みに合わせれば参加し易いことと、7月下旬から8月中旬までは一般登山者が多く登山道の混雑が予想され、下山時の所要時間が読めないことを踏まえ、この時期を避けて8月下旬に設定した。しかし、実際に教室に参加されたのは募集定員割れの8家族17名であった。原因は今回参加条件を保護者同伴としたため、若い保護者が平日に仕事を休むことができないという事情があったと考えられる。

第1日目は登山とし尿処理の問題をテーマとした座学を行い、その後、屋外へ出て富士山麓山の村周辺の自然休養林の中を散策しながら自然観察会を実施した。子供達は、興味深そうに葉の匂いを嗅いだり、樹皮の表面を手で撫でまわしたりしながら、講師の話に聞き入っている様子だった。自然休養林の中はブナの大木等が生い茂り、見事な自然が残されていた。

第2日目は富士登山を行った。富士山五合目(2,400m)では高度順応を行うため、朝食と登山準備に1時間を設け、午前6時半に五合目を出発した。隊は3班に分け、班長3名と支援員3名、養護員1名の7名のサポート体制で引率した。スローペースで登っていったが元祖七合目あたりから鼻血を出す子供や体調不良を訴える保護者が出て、養護員や支援員はその対応に追われるようになった。あらゆる事態を想定した役員行動マニュアルを作成して本番に臨んだが、子供間の体力差や保護者の体調不良等が発生し、九合目までに保護者3名と子供2名は隊のペースに付いて行くことが困難と判断し、下山をお願いせざるを得なかった。富士山頂へ着いたのは予定時間より45分遅れとなったため、昼食時間も十分に取れない状況であった。しかし、富士山頂まで登れた参加者達は感激一入で、「山頂に立てたのは山馴れした方達の案内があって初めて出来たこと、本当にうれしい。」と感謝された。このような状況下にあっても一人の怪我人も出さず、全員

無事に下山させることができたのは幸いであった。結果的に全員が新五合目でバスに乗車できたのは、予定時刻より1時間30分遅れの午後5時であった。帰りのバスの中では、参加者から来年も富士登山を計画して欲しいと言う声が寄せられた。この日は安定した晴天に恵まれ、参加された皆様には富士山の雄大な景色を堪能されたことと思う。

●山と溪谷社 久保田賢次氏・吉野徳生氏 「日本山岳遺産基金」について

登山家・田部井淳子さんとの共同プロジェクト「被災した東北の高校生を日本一の富士山へ」を7月22日～23日に開催し、東北の高校生74人(男子51人、女子23人)が無事、富士山に登頂した。また、10月23日に「第4回日本山岳遺産サミット」を開催し2013年度の日本山岳遺産認定地を4箇所(北海道のアポイ岳、宮城県の金華山、長野県・富山県の船窪岳、三重県の大台ヶ原大杉谷)発表し、田部井淳子さんによる特別講演を行った。



●福井県 榎田靖憲氏 「2013わくわく！ふくい山の山探検隊」

8月3日～4日の1泊2日の日程で「2013わくわく！ふくい山の山探検隊」を開催した。

沢登りは滋賀県、岩登りは京都府、キャンプ場も京都府での実施となったが、小学2年生から5年生13



名(男子3名、女子10名)が集まった。1日目午前には沢登り(シャワークライミング)探検、午後にソーセージづくり、夜にビーコンを用いたフォックスハンティングゲーム、2日目午前にはロッククライミング探検という盛りだくさんな企画であったが5名の福井県山岳連盟会員の協力が無事に終了した。

●日山協 神崎忠男会長・西内博常務理事「第4回ジュニア登山教室in立山」、「なすかし雪遊び隊2013」

今回で4回目を迎えた「ジュニア登山教室in立山」について、神崎会長がBGM付のライドショーで報告。西内常務理事から口頭で説明。過去3回は天候に恵まれなかったが、今回は晴天のもと初めて大汝山・雄山・浄土山・室堂平のダイナミックな自然を満喫できた。

また、昨年度からの新しい企画である「みんなで遊ぼう！なすかし雪遊び隊」について西内常務理事から報告。スキー教室などは地域の子供会でも行われているが、このような自然と触れあい、地域を越えた横断的な団体生活プログラムは、子ども達にとって貴重な経験になるだろう。

報告会後の懇親会には、大雪の中遅れて到着された方々も合流し15名が参加。各岳連(協会)で実践されている青少年育成事業に話題が集中した。今年度の「少年少女登山教室」開催は21の都道府県に広がった。来年度は「少年少女登山教室」をはじめ「JOCオリンピック親子チャレンジ(登山)」など多くのイベントが各岳連(協会)で開催されることを切望する。

(記 青木秀則)

第64回 Mountain World

フィッツロイ全山縦走の成功

池田常道

パタゴニアのフィッツロイ(3405m)は大小10に近い衛生峰をしたがえた連峰である。これらを結ぶ縦走は、2008年2月にアグハ・ギヨメ(2579m)からフィッツロイまでの北半分が、アメリカのフレディ・ウィルキンソンとダナ・ドラモンドによって果たされ、「ケアベア・トラバース」と名付けられた。この縦走は、横山勝丘=増本亮ペアを含めて、昨年までに5登が記録されている。2008年は、奇しくもセロ・シュタンハルト(2730m)からセロ・トーレ(3102m)までの「トーレ・トラバース」が、ローランド・ガリボッティ(アルゼンチン)とコリン・ヘイリー(アメリカ)によって初登されたシーズンでもあった。パタゴニアやアラスカの岩峰群縦走については、2012年7月号の本欄で触れている。

今回フィッツロイ縦走、いわゆる「フィッツ・トラバース」に成功したのは、アメリカのビッグウォール・スピードクライマー、トミー・コールドウェルとアレックス・オノルドである。今季のパタゴニアは、ここ2年の好条件が嘘のように以前の悪天候に支配され、シーズン前半のクライマーたちは西風の当たらない東面やマイナーピークに集中せざるを得なかったが、2月中旬になって数日間の好天が訪れた。

好機を逃さず決行したペアは2月12日にギヨメからスタートした。ヴァル・ビオイスの手前で第1夜を過ごし、翌日フィッツロイ北稜を登って頂上でビバーク、3日目はポワンスノ(3002m)頂上で一泊し、サン・テグジュペリ(2558m)を越えてアグハ・デラS(2335m)北稜基部で最後のビバークをして、16日氷河に降り立った。稜線の全長は5km、累計標高差は4000m近くに及んだ。グレードは5.11d、C1(Cはクリーンエイドを表わす)、平均斜度65度だった。回復したとはいえ、悪天候が去ったばかりのルートでは随所に氷が張り付き、フィッツロイ北稜ではクラックを掘り出すのに多大な時間を取られたという。

彼らは35ℓと25ℓのザック二つに極力軽量化した全装備をまとめ、コースの大半を同時登攀で乗り切った。ビレイし合ったピッチは、フィッツロイ北稜の3ピッチを含めて20ピッチに過ぎなかった。しかし度

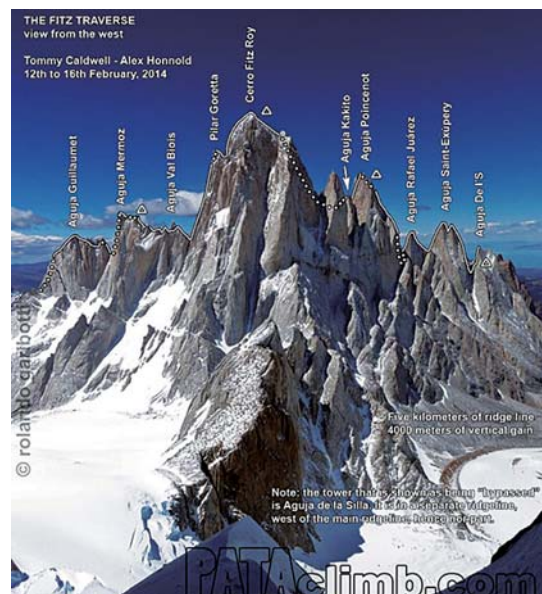
重なる懸垂下降でロープが消耗し、テグジュペリを下るときには9.8mm×60mのメインロープが38mまで短くなってしまったため、懸垂下降するのに倍近い時間がかかったという。

*

冬季ナンガ・パルバット(8126m)は、またしても落ちなかった。1月号本欄で報じたように、今冬も前年同様4隊が挑んでいたが、南西稜の2隊が2月末に7200mまで達したのを最後にすべて敗退に終わった

まずディアミール側。メスナー・ルートに挑んだドイツのラルフ・ドゥイモフィッツは5500mまで往復したところでセラック崩壊に脅かされ、1月号に書いたとおり年明け早々に断念した。1月末にBC入りしたイタリアのダニエレ・ナルディ(単独)は、ガナロ・ピークで高所順応してから4900mにC1を設けて、ママリー・リブに向かった。しかし、取付まで行く間に雪崩に襲われるなどしたため、以後の登山は断念した。

ルパール側では、先に入山していたポーランド隊とシモーネ・モーロのイタリア=ドイツ隊が前後して荷揚げとルート工作、最後には合同して3回頂上を狙った。しかし、マゼノ・ギャップを越えてからディアミール側のトラバース区間を乗り切ることができず、トマシュ・マツケヴィッチ(ポーランド)とダーフィット・ゲトラー(ドイツ)が2月末に7200mまで達したところで断念、撤収を決めた。



フィッツ・トラバースの全容、△印はビバーク地。

国際山岳連盟(U I A A)の会長を1995年から2004年まで務められたマックノート・デイビスさんが84歳でお亡くなりになりました。

1992年、日本の松本で国際山岳連盟(U I A A)総会が開催されました。約35か国から100名を越す関係者が出席され、英国からもマックノート・デイビスご夫妻はじめブラックショール氏ら著名な登山家7名が出席されました。この時がマックノート・デイビスさんと親しく話をしたのが初めてでした。マックノート・デイビスさんもクライマー・ジェントルマンでしたが、南米生まれのロレット夫人の美しさは多くの人たちが羨ましがるほどでした。松本に限らず国際山岳連盟会議では常にご一緒での出席に親しみを感じました。また国際山岳連盟会議の間中はレディス・プログラムで出席者を楽しませ、和ませてくれました。個人的にも大変お世話になり厚く御礼申し上げます。

日本では日本山岳会の中村保さんや八木原罔明さんとの交流も深く、親日派として知られ、とくにロレット夫人には東京を気に入ってもらったようでした。松本の帰りに一週間ぐらい東京に滞在することになり、当時、私の多摩センター自宅が引っ越し前で空き家になっていましたので宿舎に使ってもらうことにしましたが、日本の住宅事情をイメージして宿舎として自分たちに堪えられるのかと不安がるご様子が伝わってきましたが、案内したところ新築でまだ寝泊りに必要な家具しかなく広々とし、お風呂が大きめでジャグジーだったのに気をよくしてくれて滞在してくれました。こんなお付き合いからこの後のU I A A会議でも親しくお付き合いさせていただくなか、日本の立場をよく理解してくれました。

2002年にアメリカでのU I A A総会に、松本市が



演説するマックノート氏

市制100年を記念して2007年に国際山岳連盟総会を松本に誘致したいと提案させていただきましたが、すでに開催立候補国が数か国ありまして、この時もU I A Aデイビス会長のお取り計らいで、すでに立候補していた国に対しても、相手が理解し納得してくれる説得をもって、2007年の国際山岳連盟松本総会が会議で採決されました。

マックノート・デイビスさんは明るくユーモアのあるU I A Aの誰でもが好感を持てるメンバーのひとりでした、特にアメリカのウィリアム・パトナムさんとはいいコンビで、会議が難航すると二人の巧妙な話術で会議を翻弄し、それが何故かみんなに嫌味なく受けて会議がまとまるという場面を何回もみてきました。人徳というか人柄というか英国紳士とはマックノート・デイビスさんのような人を表徴したのだろうとも思いました。

マックノート・デイビス会長時代のU I A Aはひとつの過渡期であったようにも思われます。山岳自然環境活動が世界的に風靡し、スポーツクライミングのオリンピック競技参入政策など具体的な活動でのご苦勞を重ねられましたが、その分国際山岳連盟運営や活動に充実感があつたのも事実で加盟国としては感謝申し上げます。

2014年2月18日にロンドンで告別式がおこなわれたということですが、生前の感謝をこめて哀悼の意を申し上げさせていただきました。安らかに眠り下さい。

合掌

2014年2月25日

会長 神崎忠男

北から南から ブロック便り 中国ブロック

●鳥取県山岳協会

鳥取県山岳協会は、四季の変化に恵まれた、秀峰「大山(だいせん)」を身近に持つ、加盟15団体で構成される協会です。

平成28年度に創立50周年を迎えることから、現在、その準備を進めています。メイン事業として考えているのは、やはり海外登山です。小さな県の小さな山岳協会ですので、身の丈に合った、でも、挑みがいのある山を探しているところです。

そのほかの事業では、全国レベルのクライミング大会の招致を考えています。開催できることになれば、全国の皆さんのご来県をお願いします。

●岡山県山岳連盟

岡山県山岳連盟では、11月1日～3日に『平成26年度中高年安全登山指導者講習会』を蒜山で主管開催します。登山の計画と実施を主導するリーダーとして、実践登山で実際に使える知識とノウハウを身につけること、更にリーダーとして各山岳会・クラブ内でスキルトランスファーするためのノウハウを身につけることを方針として、登山時のファーストエイド知識、実技、低体温症や有痛性筋痙攣の原因と対応方法などを主題に計画中です。

平成26年度より、各委員会と連携しながら事務局内に「パーソナル登山ワークグループ」を設置し、パーソナル会員(個人会員)の募集・登録と登山教室(机上年6回・実践6回)開催を計画しています。また、同じく事務局内に「障害者スポーツワークグループ」を設置し、視覚障害者や肢体不自由児の登山サポートを検討する予定です。

●広島県山岳連盟

比婆山スカイランと登山交流の国際化

第1回比婆山国際スカイランは、1990年(平成2)11月ネパール、韓国の選手の参加を得て開催。途中中断もありましたが、本年第22回大会を開催するに至りました。

この大会が縁で大邱広域市山岳連盟と登山交流が始まり、また、高校生中心の交流で毎年交互に広島と大邱で20～30人規模の登山交流を行っています。

大邱広域市山岳連盟との交流は、1999年11月訪韓

以来、2013年の訪韓で実に22回に及んでいます。比婆山スカイラン、日韓交流登山とも豊富な実績を基礎に今後の発展充実が期待されています。

●山口県山岳連盟

山口国体を契機に高まったスポーツに対する意識や培われたスポーツ人材等を継承し、「する・みる・ささえる」の視点から地域への普及と定着を目的として、山口市主催・山岳連盟主管で「トップアスリートふれあいボルダリングコンペ&合同練習会」を開催します。

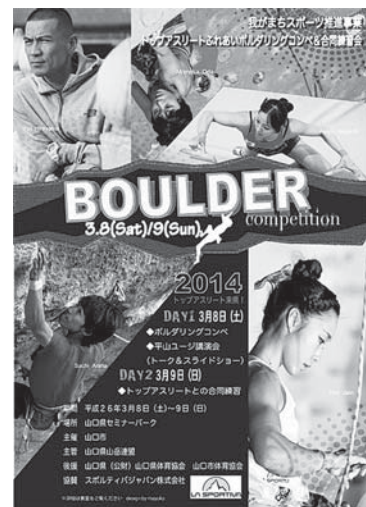
大会には国内外トップアスリートの「山口ふるさと大使」平山ユージ(埼玉)をはじめ、韓国のキム・ジャイン、野口啓代(茨城)、安間佐千(栃木)、小田桃花(山口)を招聘、全国レベルで参加者を募集してボルダリング大会と平山ユージ講演会を開催し、参加者の交流と一般市民へのクライミングの魅力などを紹介して普及に努めます。

日時：平成26年3月8日(土)～9日(日)

会場：山口県セミナーパーク・クライミング施設

及び大研修室

(記 山口県山岳連盟 小林弘之)



初夏のベストシーズンに行く登山とフットパスのハイキング

英国3つの最高峰登頂と
湖水地方、エディンバラゆったり滞在 12日間

発着地 東京・大阪 出発日 5/14(水)・6/17(火)

旅行代金 ¥580,000～¥620,000

※燃油サーチャージ(2014年2月25日現在:目安約49,000円～54,000円)が別途必要です。

旅行企画・実施 観光庁長官登録旅行業第490号/日本旅行業協会正会員/ボコフ保証会員

ALPINE TOUR SERVICE 株式会社

〒105-0003 東京都港区西新橋2-8-11 第7東洋海ビル4階 ☎03-3503-1911

大阪 ☎06-6444-3033 名古屋 ☎052-581-3211 福岡 ☎092-715-1557

e-mail: info@alpine-tour.com http://www.alpine-tour.com

平成25年度代表者会議報告

本協会では、公益社団法人への移行に伴い、議決機関で無い評議員会を置かないことにし、その代わりに代表者会議を設けて、本部と加盟団体の意見交換を図ることになった。このはじめての代表者会議が2月16日(日)に都内のTKP渋谷カンファレンスセンターで開催された。

会議に先立ち、神崎会長の挨拶があり、次いで、出席者の中から事務局の指名により古賀英年氏を議長に選出して会議日程に入った。

先ず、尾形専務理事から下記報告事項について一括説明が行われ、其の後、質疑応答を受けた。

- (1)平成25年度事業経過報告について
- (2)平成25年度会計中間報告について
- (3)平成26年度事業計画案について
- (4)平成26年度収支予算案について
- (5)平成25年度共済会事業経過報告について
- (6)平成26年度共済会事業計画及び予算案について
- (7)全国高等学校体育連盟登山専門部の加盟について
- (8)PTのアクション・プランについて
- (9)第53回全日本登山体育大会について

主な質疑・意見・要望は、以下の通り。

1. 共済会及び山岳遭難捜索保険について

山岳共済保険は、個人契約ではなく団体契約なので、団体割引30%、優良割引25%、大口団体割引10%の適用で約52%割引の低廉な保険料となっており、これ以上の割引はできない。

凍傷については、じわじわと凍傷になるのは「急激かつ偶然な外来の事故」とは言えないので支払われないが、雪崩に巻き込まれて凍傷になった場合や、雪に閉じ込められて下山できず、その結果、凍傷になったような場合は、支払われている。

2. 公認スポーツ指導員の更新手続きについて

3年前に日体協の更新システムが変わった。4年間で3時間以上の義務研修が必要となり、各岳連若しくは日山協がその義務研修事業を日体協に申請しなければならない。義務研修を終了した指導員に対しては、申請した各岳連若しくは日山協が研修終了を入力する必要がある。

3. 審判員の昇級について

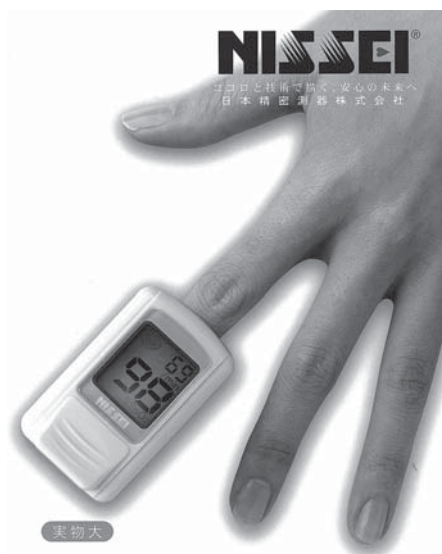
審判員、競技運営員の登録業務を迅速に行って貰いたい。また、平日開催の競技会や講習会だと受講できないので検討して頂きたい。審査基準が良く判らない。判定通知が遅い。昇級制度を整備して貰いたい。

審判員やルートセッター資格を取得しても、その資

第9回 山岳スキー競技日本選手権大会おめでとうございます。

弊社ではパルスオキシメータ（経皮的動脈血酸素飽和度計）“パルスフィット BO-600”を**格安**の値段で提供させて頂いております。ご希望の方は、下記までお申込み下さい。

1.8万円!!
ポッキリ



田中産業株式会社

〒113-0033 東京都文京区本郷 3-16-3 電話：03-3814-7181

格を活用する場がない。全国で開催されている競技会を精査して公認化の可能なものを選択するルールを明確に規定して貰いたい。

4. 組織WGのアクション・プランについて

昨年、2013年～2020年までのWGアクション・プランを提示した。2月27日にWG総括会議を開催し、アクション・プランの見直しを図って3月の理事会で報告したい。

5. 自然保護委員総会について

山の自然を守る活動が展開できない自然保護委員会では存在理由がない。

各県での山岳自然環境の問題点を取りまとめて、日山協として提言をまとめていくような方向に活動をシフトしていくべきではないか。

6. レスキュー指導員制度について

レスキュー指導員制度については、制度の運営・維持を考えた時の事務作業増加のデメリットや次々と変わる最新技術への対応(再認定等)などを考えると難題である。指導員制度を設けたとしても一般登山者へのレスキュー技術の教育浸透がよく見えてこない。長期的スパンで考えるのであれば、登山者全体の教育ニーズは、どこにあって、教育するためのデザインは、どのように描けば、要求に応じた教育が提供できるのか、そのためにどういう指導員や制度が必要なのか、見直しの時期に来ているように思われる。

7. 高校生選手登録と高校生登山の振興について

選手登録料の事務手数料は、全国高体連登山専門部に還付されるが、残り60%の選手登録料についても高校生の登山活動事業費に還元して貰いたい。ジュニア普及の事業計画についても少年少女対象の事業計画はあるが、高校生対象の事業計画が少ないので、検討して貰いたい。 以上

出席者：神崎忠男会長、八木原罔明、國松嘉伸・佐藤旺各副会長、尾形好雄専務理事、西内博、仙石富英、瀧本健、森下健七郎、京才昭、水島彰治・青木秀則各常務理事、相良忠麿、増山茂各理事、石倉昭一・澤田実各委員長、岡本忠良・中島正喜各監事。(以上、役員・委員長18名)

神山健(北海道)、川端満(青森)、小山勝稔(岩手)、齋藤英次(宮城)、佐藤健(秋田)、佐々木義博(山形)、佐藤章一(福島)、田所洋一(茨城)、天野賢一(埼玉)、岩崎喜司(千葉)、菊池稔(神奈川)、遠藤俊一(新潟)、開澤浩義(富山)、亀田行宣(石川)、榊田靖憲(福井)、塩澤寿雄(静岡)、安藤武典(愛知)、門山信男(三重)、塚原孝司(岐阜)、片岡幸一(滋賀)、四方宗和(京都)、飛田典男(大阪)、古賀英年(兵庫)、大日公一(奈良)、小坂秀己(鳥取)、岩成久(島根)、山田雅昭(広島)、古林喜明(山口)、玉垣光伺朗(香川)、椎野彰浩(徳島)、麻田正博(高知)、山上司(福岡)、宮原敏明(佐賀)、溝上春見(長崎)、西本安幸(熊本)、原勇人(大分)、古里亜夫(宮崎)(以上、代表者37名)



平成26年度2月(26年2月)
常務理事会報告

日時 平成26年2月6日(木)
17:30～20:45
場所 岸記念体育会館103会議室
出席者 神崎会長、八木原・國松・佐藤副会長、尾形専務理事、小野寺、西内、仙石、森下、京才、水島、瀧本、青木各常務理事、中島監事

1. 専門委員会動静

1月常務理事会以降
(1月10日～2月5日)

[報告]

(1)国際委員会

1月14日(火) 出席者10名
ア 平成25年度海外登山奨励金交付登山隊の審査結果について
イ 海外登山奨励金制度の見直しについて
ウ 平成26年度事業計画・予算案について
エ International Trad Climbing

Meetについて

・2014年9月、イタリア
オ ネパール登山規則改定2014について
カ 海外登山技術研究会の準備について
(2)競技部合同委員会
1月17日(金) 出席者16名
ア 選手登録データベースの構築について
イ ボルダリング・ジャパンカップ大会について
ウ 2014ユース日本選手権大会について
エ IFSCクライミングワールドカップ印西2014準備について
・第1回実行委員会開催(1/29、印西市)
・第4回日山協実行委員会(2/20、岸記念体育会館)
オ ブロック別競技研修会の講師選出について

カ 和歌山特別研修会への講師派遣について

・2/2、西原常任委員を派遣
キ ユニフォーム規程について
ク B級ルートセッター昇格について
・新井、渡辺、小野寺の3名を昇格
ケ 国体山岳競技規則の改訂について
コ アジア大学スポーツ連盟関係委員候補者の推薦について
・水村信二(明大)の推薦
サ 1月常務理事会報告(1/9)
シ パラクライミング小委員会(1/3)報告
ス 選手小委員会設置準備委員会の開催(1/18)について
セ 第4回全国高等学校選抜クライミング選手権大会報告
ソ 2014クライミング日本選手権「マムートカップ」報告
タ 和歌山国体第2次正規視察報告
チ 平成26年度競技運営委員長について
・西原常任委員を候補者推薦
(3)ジュニア普及委員会
1月18日(土) 出席者3名
ア 平成26年度事業計画及び予算

案について
 イ ジュニア・普及情報交換会について
 ウ なすかし雪遊び隊2014について
 (4)医科学委員会
 1月18日(土) 出席者11名
 ア 平成25年度活動報告
 ・トレラン大会への医療支援について(ハセツネカップ:神尾、東丹沢トレラン:堀井、白山ジオトレイル:水腰)
 ・学校登山の実態調査と医療支援について(水腰、千島)
 ・ジュニアクライマーの実態調査とトップクライマーの体力測定について(西谷)
 ・UIAA MedCom「Non Caucasian and High Altitude」について(松林)
 ・日本登山医学会認定山岳医事業(増山)
 ・日本登山医学会ファーストエイド講習会(増山)
 ・NPO富士山測候所を活用する会(浅野)
 イ 平成26年度事業計画と予算案について
 (5)自然保護委員会
 1月18日(土) 出席者14名
 ア 12月常任委員会議事録の確認
 イ 1月常務理事会報告
 ウ 「山の神の会」(12/12、新橋)の報告
 エ 平成26年度事業計画と予算案について
 オ 常任委員研修会について
 ・6/14(土)~15(日)、御岳山
 カ 第38回自然保護委員総会について
 ・11/24(祝)、広島市
 ・第39回開催候補地について
 キ ニュースレター(季刊)の発行について
 ク 指導員制度の再構築について
 ケ 指導員の手引き及びPRカードの発行について
 コ 指導員の育成について
 サ 第3回関東地区自然保護交流会(栃木・10月)について
 シ 指導員研修会について
 ・1/18(土)、国立オリンピック記念青少年総合センター
 (6)遭難対策委員会
 1月26日(日) 出席者15名
 ア レスキュー講習会の反省
 (7)ジュニア・普及委員会
 1月31日(金) 出席者4名
 ア 平成26年度中高年安全登山指導者講習会連絡会議報告
 イ 第54回全日本登山体育大会について
 ・平成27年10月9日(金)~11日(日)、栗駒山周辺、5コース
 ウ 平成26年度事業計画及び予算案のヒアリング報告

エ ジュニア・普及情報交換会の準備について
 オ なすかし雪遊び隊2014について
 カ 全日本登山体育大会の今後の予定について
 (8)指導委員会
 2月3日(月) 出席者8名
 ア 1月常任委員会議事録の確認
 イ 1月常務理事会報告
 ウ 常任委員研修会報告
 ・2/1~2、谷川岳、参加者6名
 エ SC指導員養成講習会報告
 ・地方開催:1/18~19、1/25~26、鳥取
 オ 指導員認定申請
 ①AC指導員・東京6名、栃木14名
 ②SC指導員
 ・鳥取11名、神奈川4名、中央開催(加須)8名、沖縄12名
 ③SC上級指導員・神奈川3名
 ④AC上級指導員・中央開催1名
 カ 指導員復活申請
 ・清水明(京都)
 キ 氷雪技術研修会について
 ・2/15~16、大山、参加者予定9名
 ・4/26~27、富士山、主管依頼と告知について
 ク 安全登山実践講座について

2. その他の重要事項

(1月10日~2月5日)

[報告]

- (1)藤井信参与(新潟)逝去。享年83歳
 (2)「森を走ろう」集い 1月13日(月)

- 於:立正大大崎校舎 八木原・佐藤副会長、水島・仙石常務理事
 (3)アマチュアスポーツ新春懇談会
 1月15日(水) 於:NHK本館 神崎会長、尾形専務理事
 (4)第63回日本スポーツ賞表彰式 1月17日(金) 於:ホテルオークラ東京 神崎会長、尾形専務理事
 (5)顧問・参与会 1月18日(土) 於:アルカディア市ヶ谷 神崎会長ほか30名出席
 (6)2014年新春懇談会 1月18日(土) 於:アルカディア市ヶ谷 神崎会長ほか145名出席
 (7)関東ブロック競技研修会 1月18日(土)~19日(日) 於:栃木 高山・山本委員長、土屋常任委員
 (8)平成26年度中高年安全登山指導者講習会引継ぎ会議 1月19日(日) 於:岸記念体育会館 神崎会長、尾形専務理事、仙石・青木・瀧本常務理事、岡本監事
 (9)大阪府山岳連盟新春交歓会 1月19日(日) 於:ホテル阪急インターナショナル 國松副会長
 (10)第22回オリンピック冬季競技大会日本選手団結団式・壮行会 1月20日(月) 於:グランドプリンスホテル新高輪 神崎会長
 (11)山岳7団体自然環境連絡会 1月24日(金) 於:労山事務局 石倉委員長、徳永常任委員
 (12)レスキュー講習会(積雪期) 1月24日(土)~26日(日) 於:土合・谷

寄贈図書

寄贈本	山と溪谷社	「黒部の山賊 アルプスの怪」伊藤正一著
雑誌	東京新聞出版部	「岳人」No.801 2014年3月号
	山と溪谷社	「山と溪谷」No.947 2014年3月号
	兵庫県山岳連盟	「兵庫山岳」第560号
	横浜山岳会	「月刊 横浜山岳会」980号
	日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト	「HAT-J NEWS」No.92
	(公財)健康・体力づくり事業財団	「健康づくり」No.430
	新潟県山岳協会	「新山協ニュース」第311号
	(公社)日本山岳会自然保護委員会	「木の目 草の芽」第108号
	(独)国立スポーツ科学センター	「JISS News Letter」Vol.26
	(公財)日本体育協会	「体協スポーツニュース・フェアプレイニュース」2014年2月3号
	(公財)日本ボウリング協会	「JBCニュース」507号
	愛知県山岳連盟	「愛知岳連ニュース」第406号
	(公社)日本武術太極拳連盟	「武術太極拳」No.292
	埼玉県山岳連盟	「埼玉岳連」第47号
会報	環境省羽黒自然保護官事務所	「飯豊連峰保全連絡会ニュースレター」第21号
	Korean Alpine Federation	「Korean ALPINE News」Vol07 2013 Dec
	日本勤労者山岳連盟	「登山時報」No.469 2014.3
	(株)モンベル	「OUTWARD」No.63
	神奈川県山岳連盟	「ときわ木」164号
	東京野歩路会	「山嶺」Vol.91 No.1008
	Korean Alpine Federation	「大山聯」Vol.182 2014 February
	(公社)日本山岳会	「山」No.825 2014年2月号
	明治大学山岳部炉辺会	「炉辺通信」No.175
	中国登山協会	「山野 中国戸外」総第186期 2014年2月
	長岡ハイキングクラブ	「山なかま」室賀輝男さん追悼誌
	日本山岳写真協会	「日本山岳写真協会ニュース」第408号
	やまびこ山想会	「やまびこ」第152号
	おいらく山岳会	「山行手帖」No.651 '14.3

- 川岳 西内常務理事
- (13)東京都山岳連盟新春の集い 1月25日(土) 於:東京グランドホテル 神崎会長
- (14)WC印西大会2014実行委員会 1月29日(水) 於:松山下公園総合体育館 森下常務理事、高山・山本・北山委員長
- (15)指導常任委員研修会 2月1日(土)~2日(日) 於:谷川岳 永井副委員長ら6名
- (16)和歌山県競技特別研修会 2月2日(日) 於:和歌山県 西原常任委員

3. 議事

- (1)平成25年度1月常務理事会議事録の承認について(承認)
- (2)平成26年度事業計画及び予算案について(提案通り承認)
- (3)平成26年度山岳共済会事業計画及び予算案について(一部訂正で承認)
- (4)代表者会議の次第・報告事項について(提案通り承認)
- (5)平成27年度勲章及び褒章候補者の推薦について(事務局一任で承認)
- (6)感謝状贈呈について(前監事・福田昇氏への贈呈を承認)
- (7)山岳スキー競技アジア選手権大会への派遣について(承認)
- (8)報告事項
ア 会計月次
イ 新春懇談会及び顧問・参与会報告
ウ WGアクション・プラン経過報告
エ トレラン小委員会報告
オ 選手登録について
カ 競技運営委員長の交代について
キ 全日本登山体育大会の後催県について

4. 役員等の派遣について

- (1)全国山岳遭難対策協議会幹事会 2月7日(金) 於:文部科学省会議室 西内常務理事、中川事務局員
- (2)U A A 記念総会打合せ 2月12日(水) 於:広島市 神崎会長、小野寺、京才常務理事
- (3)日本勤労者山岳連盟第31回総会 2月15日(土) 於:晴海グラン

- ドホテル 神崎会長
- (4)第52回海外登山技術研究会 2月15日(土)~16日(日) 於:国立オリンピック記念青少年総合センター 神崎会長、澤田委員長
- (5)中国ブロック競技研修会 2月15日(土)~16日(日) 於:島根県立青少年の家 日次副委員長、松田・西原常任委員
- (6)近畿ブロック競技研修会 2月15日(土)~16日(日) 於:滋賀 山本委員長、滝内常任委員
- (7)氷雪技術研修会 2月15日(土)~16日(日) 於:大山 永井副委員長ほか
- (8)北信越ブロック競技研修会 2月15日(土)~16日(日) 於:石川県金沢市・医王山スポーツセンター 森、佐原常任委員
- (9)ボルダリング・ジャパンカップ 2月22日(土)~23日(日) 於:静岡県・Climbing JAM 東静岡 神崎会長、森下常務理事、山本・北山委員長
- (10)山岳スキー競技アジア選手権大会 2月22日(土)~23日(日) 於:韓国 佐伯常任委員、選手9名
- (11)山岳7団体自然環境連絡会 2月28日(金) 於:労山事務局 石倉委員長、松隈・徳永常任委員
- (12)IFSC総会 3月1日(土)~2日(日) 於:フランス・パリ 神崎会長、小日向副委員長
- (13)全国「山の日」制定協議会臨時総会 3月4日(火) 於:弘済会館 神崎会長、尾形専務理事

5. 後援、協賛等の依頼について

- 「7大陸最高峰登頂報告会・最近の雪崩遭難事故を考えるシンポジウム」後援名義(福井岳連主催)(事前承認済み)
- 「東北の高校生の富士登山~登ろう!日本一の富士山へ~」後援名義(山と溪谷社・日本山岳遺産基金/田部井淳子主催)(承認)
- 「アンナプルナ南壁-7,400mの男たち」(株ドマ)(承認)

6. 報告

- (1)自然保護指導員の承認 なし
- (2)指導員の認定承認
- ①AC指導員
- 岡崎幸治、杉本弓子、手塚武弘、榎昭善、吉野陽子、篠原治義、以上、東京6名
 - 古内光吉、内間茂、笹沼高夫、内田広昭、橋田研一、古市卓也、小松原政彦、小滝雅人、高根沢修二、大森基男、小池博、本間義英、仲島正子、滝澤宏之、以上、栃木14名
- ②AC上級指導員
- 梶谷博、以上、中央開催1名
- ③SC指導員
- 神田恭行、柳瀬昭史、正富靖章、多久英作、福谷陽一、富澤隆一郎、本田隆志、瀬戸啓太、桑本洋志、廣兼純、武知亮、以上、鳥取11名
 - 高井博之、岸本郁代、平野直子、植木喜重、以上、神奈川4名
 - 関一成、長谷川美玲、桶山徳彦、門間希美、森下峻也、小原直子、武田友希、高橋一生、以上、中央開催(加須)8名
 - 田場典淳、細川浩、松本成示、加藤道浩、早瀬健彦、松田恒一郎、比嘉正之、榎原海里、稲富初子、松田順子、中里治男、竹中陽一、以上、沖縄12名
- ④SC上級指導員
- 森本穰、六角智之、武井あゆみ、以上、神奈川3名
- (3)B級審判員の昇級
新井好司(群馬)、渡辺潤(栃木)、小野寺訓(岩手)、以上3名

編集後記

公益法人になってもうすぐ1年。組織・事業・財政の見直しと確立にワーキンググループを立ち上げ取り組んでいる。片づけや整理整頓は煩わしい。まして50年以上住んでいるところはなおさらだ。「断捨離」の気持ちで取り組まなければ変われないと思う。もちろん適切なマネーとマンパワーも必要だ。(広報担当 水島彰治)

登山月報 第540号

定価 100円(送料別)
 予約年間 1,200円(送料共)
 昭和45年12月12日
 第三種郵便物認可
 (毎月1回15日発行)

発行日 平成26年3月15日
 発行者 東京都渋谷区神南1-1-1
 岸記念体育館内
 公益社団法人日本山岳協会

電話 03-3481-2396
 F A X 03-3481-2395

NPO法人 北丹沢山岳センター

事務局 〒252-0184 神奈川県相模原市緑区小淵1545-1
 TEL 042-687-4011 FAX 042-687-3980
 E-MAIL kitatanzawa@kib.biglobe.ne.jp

蛭ヶ岳山荘 TEL:090-2252-3203(衛星電話)

神の川ヒュッテ TEL:042-787-2276

和崎「時の茶屋」TEL:042-687-2882

理事長・代表 杉本憲昭

NPO法人 北丹沢山岳センター

事務局 〒252-0184 神奈川県相模原市緑区小淵1545-1
 TEL 042-687-4011 FAX 042-687-3980
 E-MAIL kitatanzawa@kib.biglobe.ne.jp

- 北丹沢12時間山岳耐久レース実行委員会
- 陣馬山トレイルレース実行委員会
- 八重山トレイルレース実行委員会
- 東丹沢宮ヶ瀬トレイルレース実行委員会

大会々長 杉本憲昭



守ります。美しい日本の山。

あなたの保険は、 安心して登山ができる保険ですか。

救助費用はタダではありません。
山岳保険の加入は登山者のマナーです。

■平成24年山岳遭難の概況

(警察庁生活安全局地域課 平成25年6月13日)

発生件数 **1,988** 件 (前年対比 158 件増)

遭難者数 **2,465** 人 (前年対比 261 人増)

死者・行方不明者 **284** 人 (前年対比 9 人増)

詳しくは → <http://www.sangakukyousai.com>

お問い合わせは

日本山岳協会 山岳共済会

事務委託：日本山岳協会山岳共済事務センター
月～金 10:00～17:00 (土・日・祝日除く)

〒170-0013 東京都豊島区東池袋 3-7-11-707

TEL: 03-5958-3396 FAX: 03-5958-3397

E-mail: sangakukyousai@mbd.ocn.ne.jp

U R L : <http://sangakukyousai.com>